

日本社会心理学会会報

216号

発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 広報委員会(担当常任理事:宮本聡介)

2018年6月20日

日本社会心理学会第59回大会へのお誘い

追手門学院大学 浦 光博

2018年8月28日(火)と29日(水)の2日間、**日本社会心理学会第59回大会**を**追手門学院大学**にて開催させていただきます。今回の大会日程の前後には心理学系他学会の大会が相次ぎます。また、夏期休暇中とは言え平日の開催ということもあって、日程のやりくりが難しいという会員もいらっしゃるかもしれませんが、どうか万障お繰り合わせの上、ご参加下さいませようお願い申し上げます。

今回の大会の基本コンセプトは1つ。「みんなで社会心理学を語ろう」です。最近の大会は、毎回600名から700名を超える会員が参加し(これは全会員数の3分の1以上が毎年参加していることを意味します)、活発な研究発表が行われています。シンポジウムやワークショップも盛況です。それは望ましいことではあるのですが、発表件数の増加に伴い1つ1つの発表に十分な時間をとることが難しくなり、特に口頭発表ではディスカッションの時間が十分にとれず、物足りなさを感じることも少なくないように思います。そのような状況を踏まえ、59回大会では個々の発表の一層の充実を図り、会員同士が研究について大いに語り合い意見を交わし合える場にしたいと考えました。

そのために、まず、大きな企画としては常任理事会企画によるシンポジウム1つだけとしました。そのテーマは基本コンセプトそのままに「社会心理学を語ろう」です。このテーマの下、これからの社会心理学の方向性を考える際の重要なテーマとなるであろう「生物-心理-社会モデル」「社会実装」「研究法」をサブテーマとしました。それぞれに関連して活発な研究活動を続けておられる3名の気鋭の研究者に、ご自身の研究実践を踏まえて大いに語っていただき、ディスカッションのきっかけにしたいと考えています。

研究発表のセッションでは、ささやかではありますがいくつかの工夫をしました。まず、口頭発表の形式としてショートスピーチセッションに加えてロングスピーチセッションを設けました。ショートスピーチセッションの発表時間は20分(発表15分、質疑応答5分)としました。ロングスピーチセッションでは1発表者につき40分を割り当て、フリーディスカッションの場としました。40分をどのように使うかは各発表者の裁量にお任せします。ポスター発表についても、1セッション40件までとすることで、口頭発表セッションでのテーマとの重複が少なくなるようにしています。これらの工夫が、会員同士の語り合いを盛り上げる結果につながることを願っています。

追手門学院大学も本大会の前後にある学会大会の開催校も、いずれも大阪の北摂地区にあります。この北摂地区は、心理学関連の学部学科を持つ大学が多数あり、心理学の里山とも言える地域です。そのような場所で、研究者が一堂に会し互いの研究について大いに語り合い、社会心理学の未来を切り開くことのできる場としたい。準備委員会一同はそのような気持ちを共有し、みなさまのお越しを心からお待ちしています。

(うら みつひろ・追手門学院大学)

- 日本社会心理学会第59回大会 web サイト:<http://www.socialpsychology.jp/conf2018/>

第5回春の方法論セミナー開催報告

工藤恵理子

2018年3月21日、**明治学院大学**を会場に第5回春の方法論セミナーが開催されました。今回は欲張って、**伊藤言**先生(東京大学)、**坂本次郎**先生(専修大学)による経験サンプリング A to Z と、**小杉考司**先生(山口大学)、**紀ノ定保礼**先生(静岡理工科大学)、**前田和寛**先生(比治山大学)による R/RStudio 入門の2つのセミナーを並行して開きました。当日は季節外れの寒波が到来し、雪まで降りました。そんな悪天候の中でした

が、講師の先生方の入念なご準備により、たいへん充実した内容の熱のこもったセミナーを開くことができました。社会心理学会会員以外の方にも多数お越しいただきました(約半数)。

これまでのセミナーを踏襲し、youtubeによるlive中継も試みましたが、初めての中継作業のため、最初の方は音声に不具合があり、うまく配信することができませんでした。中継を視聴なさろうとご準備いただいたみなさまには誠に申し訳ありませんでした。

今回のセミナーでは、新しい研究手法を身につけるためのサポートとなる内容を目指しました。録画につきましては、学会ホームページで公開しておりますので、広くご活用いただくと幸いです。資料等も公開しておりますので併せてご利用下さい。また、経験サンプリングやR/RStudioを始めたいという方が周囲においででしたら、ぜひご紹介ください。

最後になりましたが、会場の手配を含め当日まで宮本聡介先生に手厚いサポートをしていただきました。誠にありがとうございました。また、当日、いろいろな方に様々な形でサポートをしていただきました。おかげさまで、委員会のメンバーが交替して初めてのセミナーでしたが、無事に開催することができました。

#講師の先生方のご所属はセミナー当時のものを書かせていただきました。

(くどうえりこ・東京女子大学)



セミナー当日の様子は下記 URL よりご覧いただけます。

・経験サンプリング AtoZ

https://www.youtube.com/playlist?list=PL7OS4lcGSZ3BeAjZIZQzHSdGFM_AgD0aA

・R/RStudio 入門

<https://www.youtube.com/playlist?list=PL7OS4lcGSZ3B1R3kbwu57jPNEpacCCAwP>

春の方法論セミナー 参加記



堀田結孝

2018年3月21日、明治学院大学で開催された第5回春の方法論セミナーに参加した。今回は、RStudioと経験サンプリング法(Experience sampling method: ESM)の2つのセミナーの同時開催で、参加者はどちらかを選んで参加できる形式であった。私はESMのセミナーへ参加した。私はこれまで実験的手法を主に扱ってきており、調査研究に関してはそれほど経験がない。そのような私が、なぜESMのセミナーを選んだのか。きっかけは、過去にダニエル・カーネマンの「ファスト&スロー」(2011年、早川書房;第37章参照)などから幸福感の研究について調べていた時期があり、その知見の面白さからもぼんやりと興味を抱いていた。最近では、学部生の卒論研究のテーマとして、精神的健康や幸福感のテーマを扱い始めている。上述の文献などから、ESMは日常的なイベントとポジティブ感情との関連を検討するために、幸福感の研究文脈でよく使われる手法として理解していた。以上のような経緯から、後学のためにとESMのセミナーを選んでみた。

講師の伊藤言先生と坂本次郎先生が交代しながら話を進めてくださった。第1部では、ESMを利用した先行研究を紹介しながら、ESMの意義について解説してくださった。そもそもESMとは、調査対象者たちに一日ないしは複数日の様々な時間帯に、複数回に渡って回答を要請する調査方法である。ESMはこれまで研究者と調査対象者双方にかかる負担が大きい点が障壁となっていたが、現在はスマートフォンの普及によりデータ収集が比較的容易になり、研究も増えているとのことであった。ESMの特長は、時系列情報や個人内変動など、一時点での質問紙調査では測定不可能なデータを用いた解析ができることにある。

第2部と第3部はESMを実施する上でのインターフェイスやノウハウなど、実践に関する解説であった。伊藤先生はPACOというスマートフォン用のアプリケーション、坂本先生はGoogleのサービスを用いた例を紹介してくださった。アプリケーションのインストールから細かな設定などを詳しく解説してくださった。実際の実施方法については、当日の資料を参照されたい。また、「何名を対象に調査すべきか」、「一日に何回実施すべきか」など、経験者の視点からでないと感じにくい貴重なノウハウを伺うことができた。

第4部は、ESMで取得したデータの解析に関してであった。RやHADなどのソフトウェアでの解析例を挙げながら、データの前処理や解析の方法について丁寧に解説してくださった。

ESMを利用した研究は以前から報告があるが、いざ自身が取り組むとなるといくつかのハードルにぶつかるであろう。一つはデータを実際にどう取るかという問題、もう一つは取得したデータをどう解析するべきかという問題であろう。今回のセミナーは、講師の先生方がそれぞれに対して参考になるアドバイスを提供してくださった。セミナーで紹介されたアプリケーションやサービスは、調査対象者及び研究者の負担を軽減して効率よ

くデータを取得できる方法であり、ESMに限らず通常の質問紙調査においても有用である。技術の進歩を感じた。ESMで入手されたデータは当然ながら繰り返し測定データであり、解析の際には個人差(ないしは集団差)の影響を考慮する必要がある。そこで必須となる手法は、過去の方法論セミナーのテーマでもあった一般化線形混合モデル(generalized linear mixed model: GLMM)及び階層ベイズモデリングである。今回のセミナーでも、GLMM及びベイズ統計の理論から実践にかけて詳しく解説され、過去の方法論セミナーの復習の機会となった。データの特徴を活かせば、状態空間モデルなど時系列を交えたより複雑なモデルの解析にも発展し得るだろう。

過去4回の方法論セミナーはどちらかというと最新の統計解析の理論に焦点を当てた内容であったのに対し、今回は調査や解析のノウハウを強く押した構成であり、参加する前は過去の方法論セミナーと趣向が大きく変わったように感じていた。しかし、参加を終えて、今回は過去のセミナーでの学びを応用及び実践へ移す試みとなったように思える。GLMMやベイズ統計モデリングなど、その有用性自体はわかるが実際に社会心理学の研究文脈で扱う機会がどれほど有り得るのか、しっくりこなかった人々も多かったのではないだろうか。しかし、ESMで取得したデータはまさに繰り返し測定や時系列データであることから、上述の手法を活かすことが出来る。今回同じくESMのセミナーを見た方々には、過去の方法論セミナーの内容も是非一度振り返ってみることをお勧めしたい。講師の両先生及び学会活動委員の方々には、厚く御礼を申し上げたい。

(ほりた ゆたか・帝京大学)

春の方法論セミナー R/RStudio 入門 参加記「年貢の納め時」

稲増一憲

今回の方法論セミナーでは、この春本務校の大学院に進学した学生たちとともに R/RStudio 入門に参加しました。そのためか、昨年までのように自分自身が新しいことを身に付けるだけでなく、「大学、研究所、企業など、働く場所は色々考えられるかもしれないけれど、もし仮に、彼女たちが研究者としてやっていきたいと思ったら、何が必要なだろう。」といったことを意識しながらの参加となりました。

もちろん、この場で「研究者として必要な能力はこれだ」ということを断言するつもりはありません。そうではなく、私がしたいのは「認めたくはなかったけれど、うすうす気づいていることとして、研究者として必要な能力に、いつのまにかプログラミング能力が加えられようとしてはいいやしないでしょうか。」という危機感の共有です。

私が大学院生の頃にも R が紹介されてはいましたが、その際の諷い文句は、「大学を離れて SPSS や SAS のような高価な統計ソフトが使えなくなっても、R はフリーソフトだから利用できる」、あるいはせいぜい「R は世界中の研究者が開発に関わっているので、最新の統計手法がすぐ利用できるようになる」といったものだったと記憶しています。「R コマンドーを使えば SPSS のように GUI で統計分析を行うこともできる」みたいな話もあったと思います。

今回のセミナーに参加された方の中にも、R/RStudio という統計ソフトの使い方を学ぶことを期待し、「t 検定は R でどうすればできるのか」からスタートすると思っていた方も多かもしれません。そうだとすれば「R で Web サイトも作れる」「R で論文を書ける」から始まり、実習がデータの整形からスタートしたことに面食らったのではないのでしょうか。

そう、今回のセミナーは「統計ソフト R を使えるようになりましょう」という話ではなく、「R 言語というプログラミング言語を使えるようになりましょう。」という話なんですよ。R は SPSS や SAS のお友達ではなく、Python とか Java とかそういうもののお友達。

統計ソフトの利用法ではなく、プログラミング言語の習得と考えると、随分ハードルは高くなります。昨年のセミナーで紹介されたベイズ統計モデリングへの敷居の高さの原因は、統計手法としての難しさだけでなく、たとえば入門書を読んで MCMC がどういうものかというイメージはある程度持てるようになったとしても、いざ使おうと思った際に、R や Stan を使ったプログラミングが求められることだと思うのです。

いわゆる文系であっても、研究者として生き残るために、新たにプログラミングの習得が必須となると、まだ若く時間も吸収力もある大学院生の心配をしている場合ではなく、むしろ「若手研究者」の 카테고리 から外れかかっている自分の方がまずいのではないかと、そんな不安にさいなまれます。

おそらく私の道は 2 つです。「無料で使えて知らないうちに最新の分析が実装されるソフトなら、H で始まるアルファベット 3 文字のアレがあるじゃないか。個人製作なのが心元ない(と製作者本人は言う)が、彼が元気なうちは問題なし。高価な統計ソフトを販売する企業が彼を狙って上ヶ原キャンパスに刺客を放つかも知れないが、それならプログラミングなんかじゃなくて、刺客との戦いに備えて忍術でも身に着けるほうがマシだ」とプログラミングに背を向ける道です。もう 1 つは諦めてプログラミング言語 R の習得を目指す道です。はい、諦めます。

正直、前半のデータ操作については、社会心理学で扱われる実験や調査データは整形された形で得られることが多いので、将来的に役立つだろうとは思いつつも、今すぐに必要になるという実感は得られませんでした。しかし、後半の ggplot2 を使って、グラフを重ねてデータをきれいに可視化するプロセスを体感した際に、遂に年貢の納め時が来たと思いました。

学会発表や論文であれば重回帰分析の表を載せても理解はしてもらえそうです。しかし、学部生向けの授業や一般向けの講演などを考えると、自分の思い通りにデータを可視化できるかという事は死活問題でしょう。また、「p 値を論文に載せては駄目か」「有意水準は $p < .05$ のままで良い



のか」といった論争に対して、たぶんそういうことじゃなくて、データ自体がどうなっているかをもっとよく見る、それを開示することが求められているのだろうな、と実感している状況において、こんなに心強いツールはないと思いました。

それにしても、講師の小杉先生、前田先生、紀ノ定先生のお三方、あの人たちはなぜあんなに楽しそうなのでしょう。そしてなぜ、あんなにも親切に質問に答えようとするのでしょうか。さらにはお三方だけでなく、ビジネスチャットツールである slack 上には R-wakalang というコミュニティがあって、初心者への質問にも答えてくれる方がたくさんいるという話ではないですか。

そこでふと思い出したのは、高校の放課後に友人たちと教室でプレイしていた Magic the Gathering というトレーディングカードゲームの事です。当時はようやく日本語版が発売するかしらないかという時期だったので、辞書を引きながら英語版のルールやカードの説明文をみんなで読んで、新しく始めたい人にはルールを教えて、ダブったカードを無料であげて、みたいなことをしていました。自分達が楽しいと思っているゲームで遊べる仲間が欲しかったから、初心者にはルールを教えたりカードをあげたりするのは当然のことでした。

“program or perish”みたいな話だけが強調されたならば、背を向けたくなくなったかもしれません。しかし、講師のお三方が、まるでカードゲームに誘うように、「教えてあげるからみんなで一緒に遊ぼうよ」と言っているように聞こえたのが、遂に年貢の納め時が来た実感した一番の理由なのです。

セミナーを企画・運営されたみなさん、講師のみなさん、現場スタッフのみなさん、有意義なセミナーを本当にありがとうございました。

(いなます かずのり・関西学院大学)

2018 年度「大学院生・若手研究者海外学会発表支援制度」の支援対象

日本社会心理学会 会長 浦光博

2018 年度「大学院生・若手研究者海外学会発表支援制度」の支援対象について、規程に従って下記のように選考を行いました。研究支援担当常任理事・唐沢かおり氏(東京大学)を委員長とし、理事から齋藤和志氏(愛知淑徳大学)、池田浩氏(九州大学)、会員から小林知博氏(神戸女学院大学)、繁樹江里氏(青山学院大学)の各氏を委員とする選考委員会が構成され、慎重な審議をお願いしました。今年度は、応募が一件のみであったので、その応募が支援にふさわしいかどうかという観点からの評価を行い、応募者を候補者として推薦することとしました。これについて、常任理事会および理事会にて審議の後、承認されました。支援金額は、規定に従い「航空運賃の半額+学会開催日数×5000 円」とします。

〈支援対象者、発表題目、発表学会〉

・山本佳祐(やまもとけいすけ)大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程 1 年

(When and why are helpers criticized? The mechanisms whereby ulterior motives are inferred. (Society for Personality and Social Psychology, Portland, U.S.A.)

お知らせ

本学会名誉会員の山岸俊男先生(北海道大学名誉教授)が、平成 30 年 5 月 8 日ご逝去されました。享年 70 歳。山岸先生は、特に社会的ジレンマについての心理学的研究で大きな功績をあげられ、日本だけでなく、世界の社会心理学界を牽引されました。2004 年紫綬褒章受賞、2013 年に文化功労者。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。



会員異動(2017年12月16日~2018年5月30日)

入会

《正会員》

・一般

伊藤 健治(所属なし)、宇都宮 博(立命館大学総合心理学部教授)、岡田 勇(創価大学経営学部准教授)、加藤 典生(大分大学経済学部経営システム学科准教授)、金成 慧(玉川大学脳科学研究所)、吉良 文夫(NTTドコモモバイル社会研究所担当課長)、藏口 佳奈(追手門学院大学心理学部心理学科特任助教)、高田 理衣(中京学院大学大学院看護学部看護学科)、高橋 望(琉球大学大学評価 IR マネジメントセンター特命助教)、仲間 大輔(株式会社リクルートマネジメントソリューションズ組織行動研究所主任研究員)、西村 隆次(朝日新聞社 CSR 推進部 CSR 担当付)、藤澤 隆史(福井大学子どものこころの発達研究センター)、水野 一成(株式会社 NTT ドコモモバイル社会研究所)

・大学院生

浅野 龍平(追手門学院大学心理学研究科心理学専攻)、石田 希実(奈良女子大学人間文化研究科)、伊藤 晃碧(立正大学大学院心理学研究科)、茨木 涼馬(広島大学大学院総合科学研究科)、上田 仁(三重大学大学院教育学研究科)、内山 栞里(東洋大学大学院社会学研究科社会心理学専攻)、漆谷 紗耶(広島大学大学院教育学研究科心理学専攻)、太田 彩子(筑波大学大学院人間総合科学研究科生涯発達専攻)、長田 真人(神戸大学大学院人間発達環境学研究科)、越智 宏朗(九州大学大学院人間環境学府行動システム専攻)、片山 拓海(東京大学大学院人文社会系研究科)、金内 さよ(名古屋大学大学院情報学研究科)、河田 淳(東京大学大学院人文社会系研究科)、岸本 慎司(大阪樟蔭女子大学大学院人間科学研究科)、木田 千裕(大阪市立大学大学院文学研究科)、北川 茉里奈(関西学院大学大学院社会学研究科)、ケイン 聡一(広島大学大学院教育学研究科)、小泉 喜之介(東京大学大学院人文社会系研究科社会文化研究専攻)、小関 優花(京都橘大学大学院健康科学研究科)、小宮山 雄三(北陸先端科学技術大学院大学先端科学技術研究科)、崔 凌(東洋大学大学院社会学研究科)、榊間 彩加(岐阜大学大学院教育学研究科教職大学院課程教職実践開発専攻)、佐々木 小巻(大阪大学大学院人間科学研究科)、佐藤 春樹(同志社大学大学院心理学研究科)、澤田 昂大(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)、志水 裕美(関西学院大学大学院社会学研究科)、下司 忠大(早稲田大学大学院文学研究科)、朱 瑤(北海道大学大学院文学研究科)、寿 秋露(玉川大学大学院脳科学研究科)、徐 キョウテツ(千葉大学大学院融合理工学府数学情報科学)、白石 浩喜(東京大学大学院人文社会系研究科)、新谷 茉奈(京都大学大学院人間・環境学研究科)、杉田 明日香(追手門学院大学大学院心理学研究科)、ターン 有加里ジェシカ(東京大学大学院人文社会系研究科)、高橋 綾子(東洋大学大学院社会学研究科社会心理学専攻)、高比良 桃子(広島大学大学院総合科学研究科)、田胡 巴瑠子(明治学院大学大学院心理学専攻心理学コース)、館石 和香葉(北海道大学大学院大学院文学研究科行動システム科学講座)、玉水 克明(追手門学院大学大学院心理学研究科)、張 冰(立正大学大学院対人社会心理学科)、陳 佳玉(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)、田 楊(東洋大学大学院社会学研究科)、内藤 碧(東京大学大学院人文社会系研究科)、中田 星矢(北海道大学大学院文学研究科)、成田 明日香(神戸大学大学院人文科学研究科社会動態専攻)、橋本 泰央(早稲田大学大学院文学研究科)、濱崎 洋嗣(近畿大学 CS 総合文化研究科修士課程心理学専攻)、早川 美歩(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)、平部 あずみ(広島大学大学院教育学研究科心理学専攻)、福本 都(東京大学大学院人文社会系研究科社会心理学研究室)、藤崎 樹(東京大学大学院総合文化研究科)、本間 祥吾(北海道大学大学院文学研究科)、前田 章湖(広島大学大学院教育学研究科心理学専攻)、山縣 芽生(大阪大学大学院人間科学研究科)、山上 翔平(追手門学院大学大学院心理学研究科心理学専攻)、山本 佳奈(大阪市立大学大学院文学研究科)、山本 謙治(神戸大学大学院人間発達環境学研究科)、山本 建太郎(放送大学大学院文化科学研究科文化科学専攻)、山本 琢俣(早稲田大学大学院教育学研究科)、羅 竹(日本大学大学院文学研究科)、劉 康明(京都大学大学院人間・環境学研究科)、劉 婷(広島大学大学院総合科学研究科)

退会(2017年12月16日~2018年5月30日)

赤澤 淳子、伊川 美保、池内 はるか、池田 琴恵、石井 徹、石川 咲子、今井 昭仁、上田 恵津子、梅野 利奈、瓜生 佑樹、遠藤 伸太郎、金井 雅仁、金平 希、亀川 勇太、川人 潤子、神田 真里、向後 千春、小谷 恵、斉藤 貞雄、佐伯 晴子、相良 順子、志茂田 誠(物故)、諏澤 宏恵、鈴木 敏昭、鈴木 直人、竹ヶ原 靖子、田中 一彦、谷口 晴、張 凱、塚本 尚子、手塚 友加利、戸田 晃太郎、西垣 悦代、西端 和志、沼田 潤、橋口 捷久、林 文俊、東垣 絵里香、藤本 忠明、堀内 愛子、三浦 絵美、三木 あかね、宮川 愛由、宮川 忠藏、宮本 節子、向井 敦子、武藤 杏里、安永 幸子、山岸 俊男(物故)、湯川 進太郎

所属変更

釘原 直樹(東筑紫短期大学食物栄養学科)、熊谷 智博(法政大学キャリアデザイン学部准教授)、丸岡 吉人(跡見学園女子大学)、秋山 学(神戸学院大学心理学部)、西村 洋一(北陸学院大学人間総合学部社会学科教授)、谷田 林士(大正大学心理社会学部准教授)、小杉 考司(専修大学人間科学部准教授)、村田 雅之(中央大学総合政策学部)、田中 久美子(大谷大学教育学部教育学科教授)、大山 七穂(東京女

子大学現代教養学部)、中里 直樹(高知工科大学共通教育教室)、林 春男(国立研究開発法人防災科学技術研究所)、村田 光二(成城大学社会イノベーション学部)、鈴木 淳子(東北大学名誉教授)、北村 英哉(東洋大学社会学部)、大坊 郁夫(北星学園大学・短期大学部学長)、石井 敬子(名古屋大学大学院情報学研究科)、有沢 孝治(東海大学文化社会学部心理・社会学科)、平井 啓(大阪大学大学院人間科学研究科准教授)、竹内 真純(神戸大学大学院・日本学術振興会)、迫田 裕子(九州共立大学スポーツ学部スポーツ学科准教授)、菅 さやか(慶應義塾大学文学部助教)、小森 めぐみ(淑徳大学総合福祉学部実践心理学科)、毛 新華(神戸学院大学心理学部心理学科)、大和田 智文(江戸川大学社会学部人間心理学科)、山本 恭子(神戸学院大学心理学部心理学科准教授)、森本 裕子(総合研究大学院院先導科学研究科客員研究員)、萩原 剛(一般財団法人計量計画研究所道路・経済社会研究室)、渡邊 舞(豊岡短期大学通信教育部こども学科講師)、石井 辰典(早稲田大学理工学術院総合研究所次席研究員(研究院講師))、横山 ひとみ(岡山理科大学)、谷 芳恵(神戸大学人間発達環境学研究科研究員)、荒井 崇史(東北大学大学院文学研究科准教授)、田戸岡 好香(高崎経済大学地域政策学部准教授)、尾花 恭介(SoHB Labo)、織田 涼(東亜大学人間科学部心理臨床・子ども学科講師)、澤田 匡人(学習院女子大学国際文化交流学部日本文化学科)、三上 聡美(九州大学大学院経済学研究院)、綿村 英一郎(大阪大学大学院人間科学研究科准教授)、武藤 麻美(大阪経済法科大学経済学部経営学科准教授)、矢田 尚也(関西大学教育推進部特別任命助教)、小野田 竜一(大東文化大学社会学部社会学科講師)、野澤 義隆(東京都市大学)、森 裕樹(東京都健康長寿医療センター/NPO 法人ホスピタル・プレイ)、寺田 未来(大阪電気通信大学共通教育機構人間科学教育研究センター講師)、井上 裕珠(日本大学商学部商業学科)、高本 真寛(横浜国立大学教育学部准教授)、萩原 祐二(東京理科大学理学部助教)、高田 治樹(目白大学人間学部心理カウンセリング学科特任専任講師)、川本 大史(中部大学人文学部心理学科講師)、藤田 尚弓(早稲田大学)、高田 琢弘(東海学園大学心理学部)、伊藤 言(株式会社アイデアラボ)、安達 菜穂子(大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター研究員)、箕浦 有希久(同志社大学研究開発推進機構 赤ちゃん学研究センター特定任用研究員(助教))、大崎 裕子(東京大学社会科学研究所特任助教)、三ツ村 美沙子(愛知学院大学心身科学部心理学科実験助手)、遠藤(藤) 寛子(宮城学院女子大学学生相談・特別支援センター准教授)、福田 哲也(聖カタリナ大学人間健康福祉学部人間社会学科)、鈴木 真(名古屋大学大学院)、佐藤 拓(明星大学心理学部心理学科)、竹部 成崇(一橋大学大学院社会学研究科ジュニアフェロー(特任講師))、仲嶺 真(高知大学人文社会科学部)、竹本 圭佑(大阪商業大学 JGSS 研究センター研究員)、藤井 達也(武蔵大学社会学部非常勤講師)、中村 陽人(長野県立大学 グローバルマネジメント学部)、福島 慎太郎(東京女子大学現代教養学部講師)、新井田 恵美(東洋大学人間科学総合研究所)、秋保 亮太(中京大学心理学部)、宮島 健(西南学院大学人間科学部心理学科実験助手)、井上 裕香子(玉川大学脳科学研究所 PD)、加藤 仁(滋賀文教短期大学子ども学科講師)、古川 善也(日本学術振興会(広島大学大学院教育学研究科)特別研究員 PD)、林 萍萍(神戸大学大学院国際文化学研究推進センター協力研究員)、有吉 美恵(九州大学大学院人間環境学研究院学術協力研究員)、白木 優馬(神戸学院大学)、本郷 亜維子(放送大学大学院文化科学研究科)、高野 哲朗(株式会社 日本アクセス審議役 内部統制・監査部長)、宮脇 健(日本大学危機管理学部)、和田 万里子(愛知県警察本部)、西村 光一(日本大学文理学部心理学科研究員)、若林 宏輔(立命館大学総合心理学部)、田中 皓介(東京理科大学)、滝口 雄太(東洋大学大学院社会学研究科)、鈴木 雄大(日本大学大学院文学研究科)、横光 健吾(立命館大学総合心理学部特任助教)、河合 直樹(札幌学院大学人文学部人間科学科講師)、酒井 智弘(筑波大学大学院人間総合科学研究科)、飯塚 有紀(上越教育大学)、石山 裕菜(京都橘大学健康科学部心理学科)、貴島 侑哉(宮崎市立檉北小学校)、高田 秀樹(日本エス・エイチ・エル株式会社)、陳 艶艶(福岡工業大学)

『社会心理学研究』掲載(予定)論文

第34巻第1号(2018年7月刊行予定)

- 池内裕美 溜め込みは何をもたらすのか:ホーディング傾向とホーディングに因る諸問題の関係性に関する検討
横井 良典・中谷内 一也 治療方針の共有が人工知能への信頼に及ぼす影響
山本 佳祐・田中 宏明 援助行動に対する第三者による批判の規定因:自己呈示文脈に注目して
林 幸史・小杉 考司 過去の旅行経験からみた観光地イメージ
稲増 一憲・三浦 麻子 マスメディアへの信頼の測定におけるワーディングの影響:大規模社会調査データとWeb 調査実験を用いて

編集後記

広報担当常任理事に就いてから1年が経ちました。初めてのことばかりで、右往左往しながらでした。そのためか、この1年はあっという間でした。ただ、歳を取ると時が過ぎるのを早く感じるとも言います。1年が短く感じられたのは、不慣れなことが多かったからなのか、歳のせいからなのか、定かではありません。前号(215号)の発行からも半年が経っています。その間に春の方法論セミナーが開催されました。私も経験サンプリング法の講座に参加し、一日拝聴させていただきました。この半年の間に新しい論文ニュース記事の公開も進んでいます。ご覧いただければ幸いです。任期の半分が過ぎました。本年秋には学会選挙が待ち構えています。結果の公表がスムーズにできるよう、準備を進めてゆきたいと思ひます。

(宮本聡介・広報担当常任理事)